

今・先人の足跡をたずね求めて 史跡標柱に残さん

若 原 幸 雄

昭和64年には、私達の新得町が、開基90年を迎える。

想像を絶する先人の労苦を偲ぶ時、近代的で豊かな生活の中に日々を送ることのできる幸を、深く感謝すると共に、申し訳ないという心も自然に湧いてくる。

この郷土の歴史を調べ、足跡を辿って永く後世に伝承していくことは、今に生きる私達の務めであろう。

そんな心の結びつきから、郷土研究会が、昭和56年11月に発足し、10名程の会員が月に1回の例会を重ねつつ事業の推進を図ってきた。

今年度の事業の一環として、次に述べようとする史跡標柱を5ヶ所建立することが協議され、去る8月28日に設置を完了したのである。

それぞれの土地所有者の方々の、ところよいご理解ご承諾を賜ったことと、資料調査に当り多くの関係の方にも積極的にご協力頂き、心からの感謝の気持ちと、事績を正しく伝承していく責任の大きさを痛感するものである。

標柱そのものは、高さ2メートル、10センチ角の白柱に大綱を記したものであるが、次第に内容をくわしく記録した〔史跡表示板〕に建て替えられて、永く継承されていくことを念願するものである。

1. 広内小学校跡

ところ 新得町字新得西6線84番地 屈足旭町1丁目 馬淵和男氏 所有地

開校期間 自 大正5年2月7日 至 昭和19年1月21日

現 況

パンケシントク川の上流、西6線道路が川添いから南にゆるくカーブして小高くなる右手に、すももや桑の木があり校舎はないが正面入口とおぼしきところに桜の古木が門柱のように2本ようやく息づいている。

周囲は、からまつの植林地で間伐もゆきとどいて校庭や校舎のあとかたもなく、先述の古木がその名残りを留めているのみであり、よく注意していないと見過すおそれがある。

ここを母校とした卒業生の人達のためにも、この標柱がせめての心の支えとなれば幸であり、更に新得町の教育の歴史をひもとく上でも大切なことと思う。

資料調査のあらまし

大正5年2月7日

新得尋常高等小学校所属「広内
特別教授所」創設

初代校長 寺嶋 寿門

大正9年8月21日

広内尋常小学校に組織変更

二代校長 太田 源太郎

三代校長 斉藤 福太郎

四代校長 木皿 秀吉

昭和16年

広内国民学校と改称

昭和19年1月21日

新得国民学校に併合される

五代校長 石井 直勝

通学区域

広内10号あたりから、北を12区

とし、おおむね12区一円を区域とした。設置発起人は斉藤五三郎・望木忠太郎であった。

最多児童数 大正12年には、生徒数が一番多く48名もいた。

※ 参考資料。新得小学校80周年記念誌。広内小学校卒業生 清野ヨシエさん・
泉 蔵さんにきく。



広内小学校跡標柱

2. 屈足発祥之地

ところ 新得町字屈足西2線2番地 屈足 25区 高野 正市氏 所有地

入植年月日 明治35年5月13日

入植団体 鹿兒島団体 東郷 実夫（サネオ）他6戸

資料調査のあらまし

鹿兒島県 贈於郡 財部村 東郷実夫が、屈足に始めて60戸分の原野払い下げを受け
第1陣として以下7戸が上記周辺に入植したが、最初一行は西2線2番地に拝み小屋を造
って旅装をといた。

一行は次の7名である。

屈
足
奄
祥
之
地



85年前を思い浮べて……感激新たな
松元正盛さん(88才)

東郷 実夫 中村 良之助
西田 末蔵 上原 善之助
安楽 弥市 池上 和蔵
宮原 伝助

松元正盛さん(明治31年2月10日生)に聞く。

明治35年当時数え5才だった私は石狩の国クシナイを経て一行に連れられて、日高山脈を越え新得に入った。

落合までは汽車できたと思う。

(註 明治34年9月3日落合迄鉄道が延びてきた)

後は歩いたり、背負われたり、山越えのときはかた雪の上を歩いたりした。

私は、おぼえがなかったが、後から聞いた話ではこの時新得駅通に1泊してきたという。

通り道に目につく人家もなく、最初は屈足19号の西2線2番地に拝み小屋

を建てて入植した。

入植したこの土地は、やちだもの樹勢盛んで、地味良好と思っていたが、案にはずれてひどい湿地帯であり、かしわ林のある東の方を払い下げるべきだったと親達がよく悔んでいた。

団長、東郷実夫の次男揆一(きいち・屈足小学校第1回卒業生・明治39年)は、現在も横浜で健在である。

(註 松元正盛さんは、上原善之助を父としたが、後日松元家の養子となった。

郷土研究会 機関誌創刊号(昭和59年7月発行)に、松元さんの記述あり。)

3. ペンケ沢(岩松)駅通所跡

ところ 新得町字屈足東1線232番地7
開設期間 自 大正15年 至 昭和18年
管理人 岩野 浅次郎

同地 岩野 昭吾氏 所有地

資料調査のあらまし

松浦金平・渡辺善太郎が岩松の草分けとして入植した明治43年の翌明治44年、岩野浅次郎は御影から入植して開拓に精魂を打ちこんでいた。

次第に奥地の開発も進み、岩松にも駅通が置かれることとなり、大正15年道庁から任命されて管理人となった。

官馬2頭、宿舍42坪、放牧地55ヘクタール（55町歩）を有していた。

最初月5円の手当があり、後に10円に増額された。

昭和18年9月道の指示により廃止となった。但しその時、附属物件はそのままということだったので、付与願いを提出し、民営として継続され、戦後食糧増産のために脚光を浴びたトムラウシ方面の出入りの人のために、昭和23年迄運営されたという。民営期間のことに関しては後日設置予定の史跡表示板にはそのことも記録することとしたい。

ベンケ沢(岩松)駅通所跡標柱



4. 屈足水田発祥之地

(詳細は町民文芸15号に掲載)

ところ 新得町字屈足西1線65番地 屈足31区 岩田 照一氏 所有地
創始者 森口 茂吉 (開田 森口 忍)
開田着手 明治45年4月

資料調査のあらまし

屈足水田開発の父は、森口茂吉と聞き、その系累の方を求めるべく電話帳を頼りに行動を起したところ偶然にも、その直孫に当たる森口恒人氏が、帯広市東3条南4丁目にお住いであり、しかも直接屈足水田開田の祖である、茂吉長男忍の夫人みきさんが95才でご健在で同居しておられたことはなによりの幸であった。

森 口 茂 吉

明治3年10月8日生

昭和8年11月5日没65才

大阪、河内の人で、明治30年度道、
帯広町幸震と人舞村熊牛で澱粉工場を、
又帯広でマッチ工場も経営した。

各地に農場も経営し開発に尽す。

上帯広 牧場 323町歩（ヘクタール）

帯 広 原野 500町歩

音 更 原野 200町歩

屈 足 原野 250町歩



森 口 茂 吉



夫人 ミ ネ

森 口 忍

明治20年5月1日生

昭和24年7月16日没 64才

明治45年、上帯広にて高井みきと結婚、その年の春、父茂吉の指示を受け、水田開田のために屈足原野西1線65番地（30号下）に移住、帯広から雇い入れの労務者と共に造田作業に着手した。

茂吉は、屈足に50戸分、250町分の払い下げを受け、明治41年3月4日付の新聞、「新十勝」に次の広告文がある。

（帯広市誌より 関係文のみ）

小作人募集

上川郡屈足原野未開地 50戸 新得
停車場より1里半

小作方法

鍛下年限4ケ年、外に小屋掛補助として金五円を支給す。

希望者は、至急当所に来談ありたし
明治41年2月

十勝国帯広町西1条6丁目1番地
森口開墾事務所

申込所

上川郡人舞村字熊牛

丸源谷 源之丞



森 口 忍



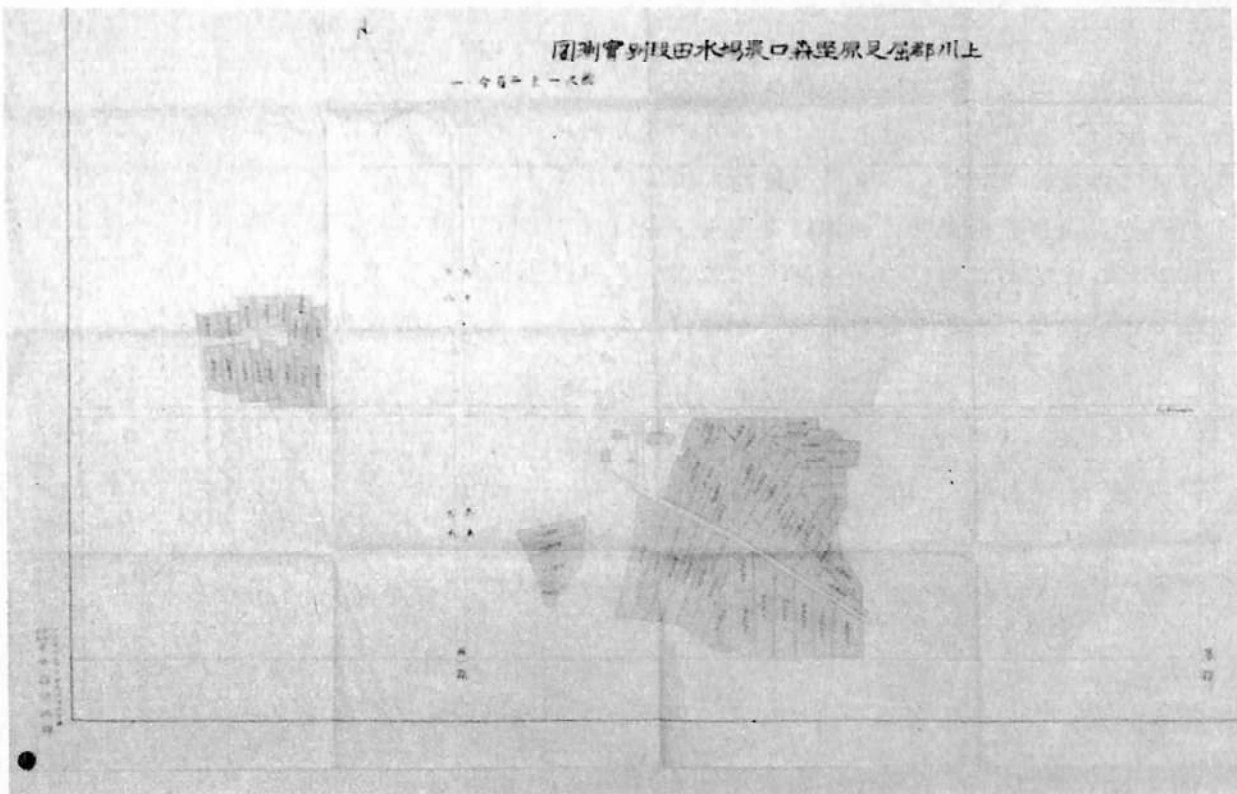
夫人 み き

根室本線の開通は、明治40年9月8日であり、その次年の3月に、この広告文のあることは興味深い。

私が最初に森口未亡人みきさん（96才）を訪ねたのは、暮も迫った去年の昭和60年12月27日であった。

帯広神社前の静かな邸宅に、みきさんと長男の森口恒人氏（学校長退職）ご夫妻との三人暮らし。

訪問の意図を汲んで、茶の間のテーブルの上に最初の「屈足原野、森口農場水田反別実測図」を開いて、キッチンと端座しておられた品のよいおばあさま、落ちついた口調でひとつひとつ語られる。話の進行に従って、その都度出される書類や写真は、みなつながり深



上川郡屈足原野 森口農場 水田段別 実測図 縮尺 $\frac{1}{1,200}$

く貴重な資料（略す）は、保存状態もまことに良好であり、その家柄とお人柄がしのばれて、心からの尊敬の念が湧いてきた。

特に大正初めの水田反別実測図は、田毎1枚1枚の図面であり、昭和45年からの水田の畑作転換により、その稀少価値はまことに大きく、更に屈足初の開田実測図と思うとき歴史的資料に価するものと思料する。

水田のための水は、屈足30号の沢水の分流（本流は31号丹羽さんの前を十勝川にそぐ）を利用した。

開田当初は、品種の不適と稲作技術が未熟のために草丈ばかり伸びて米は実入らず、大正2～3年頃、宮越惣太郎（現在屈足28区宮越慎三郎氏の祖父、米吉の伯父）を旭川の永山から呼び、水稻の試作と技術の手ほどきを受けて、ようやく稔るようになった。宮越惣太郎は、その後永山へ帰ったが、屈足の米づくりの一連の作業方法や技術は年々受け継がれ、その功績は大きかった。

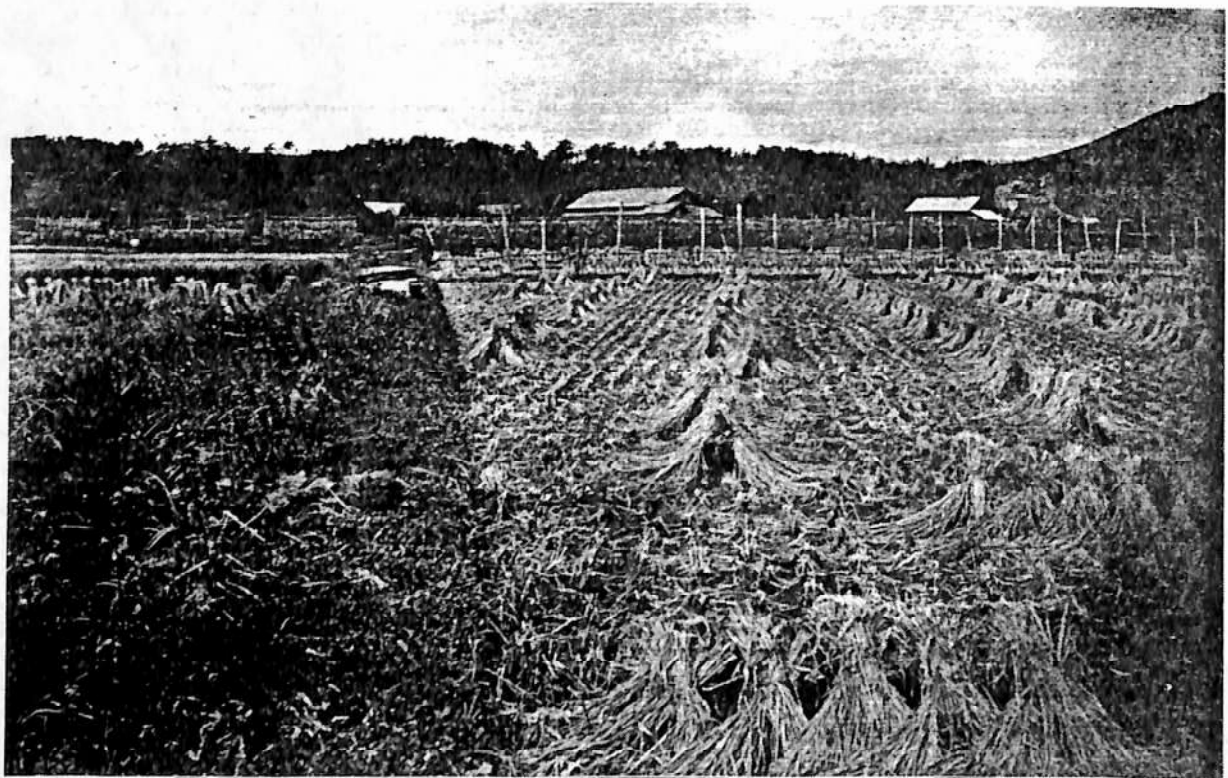
屈足水田開墾に当って、西1線25号上2戸分10町歩を宮越米吉に、西1線30号北2戸分10町歩を安芸兵蔵に与えて小作の中心となってもらった。

大正8年には豊作に恵まれ、その時の喜びを記録に残そうと、富良野から写真屋を呼び写してもらった。

当時を思い出し、苦労の後を偲んでいる。

この年は、100俵の穫り上げがあり、50俵は新得の商人に売ったが、翌大正9年5月に家の事業の都合で、50俵を持って帯広に出てきた。

初代茂吉翁が北海道開拓の雄図を抱き、企業を起し各方面に大農場を経営し、なかんずく明治40年頃から屈足の水田開発に着目し、二代忍翁その意志を承けてこれを実現し、今日の屈足農業の先鞭を着けられた功績は偉大であり満腔の敬意を表するものである。



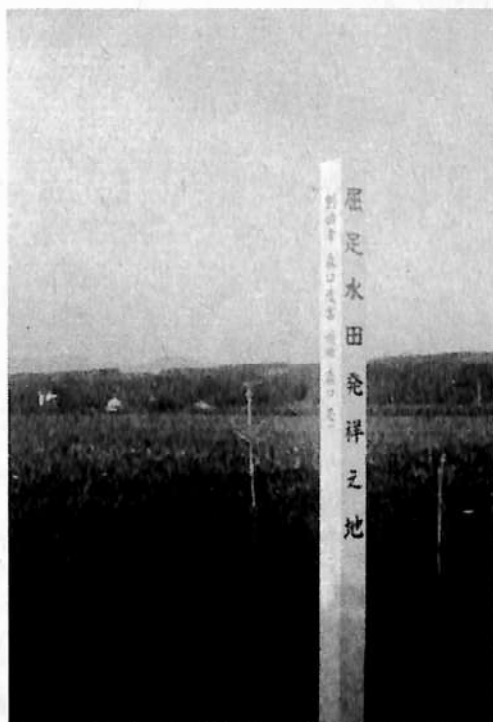
大正8年 豊穰の秋

森口農場



▲ 開田状況の視察 大正初期の鹿追農場

中央白い服、脱帽 森口茂吉 ○印



屈足水田発祥之地 標柱
昭和61年8月28日建立



森口みきさん 筆者 若原
(95才) 61.2.2

5. 十勝川渡船場跡

ところ 新得町字屈足東2線25番地3 音更町下牧 森 三樹太 所有地

営業期間 自大正3年 至昭和3年

管理人(船頭)

初代 森 利三良 二代 谷本 久太郎

初代船頭 森 利三郎

滋賀県の人 明治41年移住

資料調査のあらまし

屈足村から一部の人は十勝川を渡り、ホロナイ、クテクウシ、ウリマク方面へと東進していった。新得には鉄道が通り街がありその重要な交通路として、屈足22号から千間坂に通じる中間に十勝川の渡しが大正3年から森利三良によって開設された。

それは屈足村字新得と音更村字クテクウシを結ぶ開さく道路の付属渡船場として官設であったが

大正5年12月15日の屈足村会で、協議案として公設存続を求めて次のように諮問されている。



大正10年頃

渡船場上家で積荷をととのえ (中央口ひげ 二代目船頭 谷本久太郎)
新得へと出発するところ

《自上川郡屈足村字新得、至河東郡音更村字クテクウシ間開サク道路附近十勝川渡船場

右道路ハ大正6年ニ於テ開サクセラルベキノ処渡船場ハ道路ノ竣工トトモニ公設廃止セラレ從ッテ私設經營ニ移サルルハ疑ヒナキ処デアル。本線路ハクテクウシ及ウリマクノ二大原野ノ進展トトモニ人、馬車ノ交通イヨイヨ頻繁ヲ極ムベク依テ本渡船場ノ特に完全ナル設備ヲ要スルナリ、馬車ノ如キハ積荷ノマ、渡船セシメ、公衆ノ便利ヲ完カラシメ一方年々収益金ハ将来ノ架橋費ニ充ツルベク之ヲ特別會計トシテ村經營ノ出願ヲナサントス》

しかし同時に屈足20号に屈足橋（現在新清橋）架橋の計画（大正11年架橋）もあり村営になるまでにはいかなかった。

渡船場のあったところは今改修工事で床下げされ直線となって往事を偲ぶべくもないがその頃は上の方から熊牛寄りに大きく曲り瀬となって今の直線あたりで洩となっていた。兩岸に太いワイヤを固定して滑車を通し、船頭の胸元あたりに細いワイヤーを張りそれを手繰って川を往来していた。

雑穀を積んだ馬車を馬が挽いたままの姿での渡船で、馴れない馬は川の中にとびこみ、吠を流して拾うのに大変なこともしばしばあったと、屈足36区佐藤栄氏68才（当時小学生）のお話である。

大正10年、森利三良は後を谷本久太郎（屈足22号在住）に権利を譲り、幌内高台の新田（ニッタ）農場の支配人として移転した。

当時の渡船料は、人3銭、人馬6銭であった。（故 平野栄次前町長 談）

後を受けた谷本久太郎は順調な営業を続けていたが、前述の屈足橋の架橋と昭和3年拓殖鉄道の開通により、利用者も漸減して終業の止むなきに至ったが、その間15年に亘る（冬期間は氷橋を架けて交通を確保するなど）渡船場の運営は生活の維持と産業の発展の

ために大きく寄与し、北十勝開発の一端を担ったこの場所を後世に伝えんとするものである。

幸にしてこの度、史跡標柱設置に当り、当時の記憶の残る佐藤栄氏のご案内を頂き、後に土地権利関係調査の結果、初代船頭森利三良名の土地が川岸に（渡船場上家のあとと思われる）106坪あることを調査しこれを更に、鹿追土木現業所出張所で確認し、重ねて



渡しの風景（左上斜と顔の線にワイヤーが見える）